

啓示論

序論

聖書の歴史は一言でいうなら啓示の歴史、復活と救いに関する歴史であり、人間を救うための歴史、失った子を探し求める歴史だと言える。

啓示とは、天が主体となって神様の存在と摂理について教えてくれる方法である。すなわち神様からはそれぞれ時代ごとに中心人物を通して、その時代に応じた神様の秘密を明かして下さったが、元来人間は靈感をもった存在だから、だれでもそれを知ることができる。

ヨセフ、エリヤ、ダニエル、イエス様など、聖書に出てくる重要人物たちがそうであったように、啓示は人間を救うための救いの方法だから、あらゆる人々に開かれているのだ。

たとえるなら、TV放送局があって、放送プログラムを計画して、伝達（送信）する方は神様なのだ。私たち人間には、それぞれチャンネルを回すことのできる、受信する権限があるということだ。

このような受信、送信の過程が円滑に、かつ正確に行われるためには靈感のアンテナを正確な位置に高く立てることがまず必要だ。啓示論を学ぶ目的もここにあるので、これを通して私たちは、より確実に神様のみ旨と御言葉に含まれている真理をすぐに悟ることができるようになるだろう。

※参考 聖書における啓示の根拠

本論

啓示の種類

1. 特別啓示

(1) 声を聴く場合

使命を受ける状況にて

サムエル記上 3:1-10

神様⇒預言者サムエル、エリから摂理使命を伝授された

出エジプト記 3:4-12

神様⇒モーセ

ヨシュア記 1:1-9

神様⇒ヨシュア

創世記 6:13

神様⇒ノア

使徒行伝 23:11

神様⇒パウロ「大胆であれ」

※旧約時代には特に声によって頻繁に出現されたので、モーセという実体があったにはあったが、特に神様の立てられた者たちは神様の声を聴いた。新約時代においてはイエス様が肉体（実体）をもって来られた。

(2) 御言葉、聖書＝神様

ヨハネによる福音書 1:1

ヨハネの第1の手紙 1:1

民数記 12:6

民数記 12:7-8

※中心人物は直接啓示を受ける。

創世記 18:10-15

神様⇒アブラハム

列王記上 17:8-19

ヨナ書 1:1-2

アモス書 8:1-3

神様⇒アモス

※聖書には神様の御言葉が集約されていて、それを読むことで熱い感動を受け、音声・文学的な啓示を受ける場合が多くなるので、聖書を読むときには肉体が霊魂に話しかけるようにすればよい。

例)「悔い改めよ」(御言葉を聞くとき悔い改めるべき内容が分かる)

※参考

マタイによる福音書 12:25 「イエスは彼らの思いを見抜いて言われた。『おおよそ、内部で別れ争う国は自滅し、うちわで別れ争う町や家は立ち行かない』」

⇒リンカーン (黒人解放の動機)

申命記 32:30 「彼らの岩 (なる神) が彼らを売らず、主が彼らを渡さなかったならば、どうして、一人で千人を追い、二人で万人を破ることができたであろう」

⇒ドイツ将軍 (第2次世界大戦の時ジェット機編隊を破り、戦って勝利)

エペソ人への手紙 1:4-5 「み前にきよく傷のない者となるようにと、、、愛の内にあらかじめ定めて下さったのである」

⇒カルビン (予定論)

へブル人への手紙 10:38 「わが義人は信仰によって生きる」

⇒ルターの宗教改革

詩篇 68:5 「その聖なる住まいにおられる神はみなしごの父、やもめの保護者である」

⇒ジョージ・モロ (孤児の父)

□先生の体験□

ベトナム戦争時、進軍途中、前方で鳥たちがチッチッさえずるので隠れていると敵たちが通り過ぎ一掃された。啓示を受けて死ぬべき命が生きるようになった。

1945年8月14日一晩で草がすべて枯れ死んでしまった。(草=悪人の象徴)

2. 自然啓示

(1) 万物啓示

万物を通して神様について悟ること。

例) カササギ(カラス科の鳥)が来ると客が来る。クモ、カラス、蛇など万物には神様の能力と神性が含まれている。

ローマ人への手紙 1:20「神の見えない性質、すなわち、神の永遠の力と神性とは、天地創造このかた、被造物において知られていて、明らかに認められるからである」

(2) 実体啓示

個人的な立場で、実体的に見て悟ること

ヨナ書 4:6-11 (ヨナのとうごま体験)

※科学者たちは実体的事実と証拠を通して、神様を探していく段階(過程)

自然啓示を多く受ける。だからイエス様はあらゆる万物をもって、聖書の神様の啓示を解いてくださり、また万物を用いてあらゆる比喻を使われた。

3. 超自然啓示(間接的啓示)

(1) 幻

ヨエル書 2:28、使徒行伝 2:17、9:10、10:3、11:5、18:9、イザヤ書 29:7、コリント人への第2の手紙 12:1

(2) 夢うつつ

使徒行伝 10:10、11:5、22:17-20、

(3) 脳中のまぼろし

映写機のフィルムが送られるように、脳内を幻想が瞬く間によぎること。脳波で受けること。靈感は見えないが、脳内をよぎることである。

ダニエル書 2:28、7:13、民数記 12:6

(4) 夢

400~500箇所の内容が聖書に出てくる。

創世記 37:9、28:12、31:10、40:1-9(パロ王の夢)、41:1-8(パロとヨセフ)、民数記 12:6、列王記上 3:5、ヨエル書 2:28、マタイによる福音書 2:12、2:22、ヨブ記 33:15、ダニエル書 2:2、7:1、ゼカリヤ書 10:2、エレミヤ書 27:9、申命記 13:1

※繰り返し夢に出てくる啓示はもっと確実性を帯びている。

夢の場合、夕暮れ時の夢と明け方の夢を比べると、明け方の夢の方がもっと確実。夢は瞬間に見る(4~5秒)。

夢で霊界を知ることが、また見ることができる。どんな夢を見たのか忘れた場合、手っ

取り早くそれを知る方法は、明け方に誰にも聞く前に、お祈りしながら、もう一度夢の世界に入っていくのがよい。カメラの絞りに光が入らないようにするように、目を開ける前に、もう一度思い出しながらお祈りをしてみなさい。

(5) その他の超越的な方法

ダニエル書 5:5 「すると突然人の手の指が現れて、、、」

結論

自然、科学、学問、宗教は結局、すべて神様を探し求める道なので、神様を見ることが出来る目である。啓示とは、すなわち神様の救いの摂理をなすための過程であるから、正しい啓示の究極的な目的は「人間の回復」である。アダム以降の墮落した人間たちは神様について無知であることを宗教的な欲求から悟らせて、生まれ変わった救いに至るようになるのだ。このような啓示が完全になることは人間にかかっている。つまりこの地上で天国がなされるのも人間の責任分担にかかっていると言える。

(ただし、啓示は受けたことが聖書になくはならず、実体・事実が証明できなくてはならず、中心者から確認を受けないといけない)